

κείνος (*Ilias* 9.312) をめぐって

安西 眞

1

幕舎に引きこもってしまったアキレウスに対する、アカイア勢を代表する使者たちによる、戦場復帰祈願をめぐるやりとりが『イリアス』第9巻の後半を占める。使者はオデュセウス、アイアス、ポイニクスの3名。それぞれの立場からアキレウスに対する復帰の要請を行うが、オデュセウスによる最初の演説が、アガ멤ノンの言葉を直接に繰り返しており、最も公式的なものである。アキレウスはどの復帰要請にも「否」を発するが、問題の箇所は、オデュセウスへの返答の冒頭にある：

διογενὲς Λαερτιάδη πολυμήχαν' Ὀδυσσεύ,
 χρῆ μὲν δὴ τὸν μῦθον ἀπηλεγῶς ἀποειπεῖν,
 ἧ̄ περ δὴ φρονέω τε καὶ ὡς τετελεσμένον ἔσται, 310
 ὡς μὴ μοι τρῦζητε παρήμενοι ἄλλοθεν ἄλλος.
 ἐχθρὸς γάρ μοι κείνος ὁμῶς Ἀΐδαο πύλῃσιν
 ὅς χ' ἕτερον μὲν κεύθη ἐνὶ φρεσίν, ἄλλο δὲ εἶπη.
 αὐτὰρ ἐγὼν ἐρέω ὡς μοι δοκεῖ εἶναι ἄριστα·

「ラエルテースの子、輝かしい血統を持つ、工夫に富んだオデュセウスよ、まず、話は、疑念の余地なく表明しておかねばならない。私がどういう判断を持ち、どのようにことが成就されるのかに関してであれば。君たちが、私のそばに座ってあちこちから色々と言わないように。私には、胸のうちには別の考えをしまっておいて、口にするのはまた別のこと、という類いの人間は地獄の門と同じほど憎たらしいからだ。対して私は、自分に最上と思えることをそのまま話そう」 *Il.*9.308-14⁽¹⁾

312の κείνος に関して、実は、現在の古典学は、ほぼ正確な理解に達している。Ebeling⁽²⁾ の *Lexicon* やそれを受けたと思われる、Griffinの注⁽³⁾ (後述)は、基本的には、極めて文法的・語彙的に見て正確な理解を示している。しかし、それにもかかわらず、この κείνος の理解には、紀元前4世紀にその端を発する誤解(後述)が混乱要素として付着しており、Griffinの注を基準として見る限り、その誤解はいまだに除去されていない。「ほぼ正確」と言ったのはそういう意味である。本稿の目的は、ひとまず、その誤解を除去することである。

アキレウスは『イリアス』の中でいくつかの大演説あるいは長い言葉のやりとりを行っている。そして、それはいずれも解釈が困難なものだということになってい

(1) 本文はOCT版を印字している。

(2) H.Ebeling, *Lexicon Homericum*, Leipzig, 1885 (= Hildesheim, 1987)

(3) J.Griffin, *Homer, Iliad Book Nine*, Oxford, 1995

る。我々の例が含まれる第9巻の、アカイア勢からの戦場復帰依頼に対するアキレウスの拒絶演説、就中、オデュセウスの要請に対する最初の拒否演説は、その難しいアキレウスの演説の典型だとされている⁽⁴⁾。確かに、ひとがこの演説を正確に理解してきたとは私にも思えない⁽⁵⁾。

こういった事態が生じている時、その困難の原因は、2つの側のどちらかにあるはずだ。2つの側とは、テキストの側(多かれ少なかれこわれている)か、読み手の側(テキストが成立している枠組みを読み手が理解していない)である。この拒否演説の場合、読み手の側に全面的に責任があるのではないかと私は疑っている。κείνοςに関する誤解は、オデュセウスの要請に対するアキレウスの拒否演説の枠組みに関するそのような読み手の側の過ちと深く関わっており、また、その大枠での過ちを我々が問題にしている指示語に関する誤解が支えてもいるという関係にあると私は考えている。そういう意味で本稿は、『イリアス』が我々の理解を阻んで来た理由の小さなひとつを除去する試みである。本稿は、伝承された本文の真贋を計測したりはしないし、異読や修正読みの取捨を議論したりはしない⁽⁶⁾。であるから、決して本文批判をめぐる議論がここに展開されるわけではない。むしろ本文批判を行うべき主体の側に潜んで来た問題点を論じる。

『イリアス』を理解する上での現在の古典学の水準は、その誤解も含めて、312行に付けられたGriffinの注が代表していると私は考えている。以下、この注と対峙する形で議論を始めたい：The thought is expressed in general terms. Strictly, its first application is to Achilles himself: ‘I speak frankly - any other way would be hateful to me.’

ちょっと分りにくいところがあるかも知れないので、この英語の説明をしておく。多分日本語の「あのひと／あれ」には、この文脈でのκείνοςに該当する機能はないと思うので、κείνοςをこの論文では、とりあえず、that (kind of) manと置き換えながら考えて行くことにする。この語の性格に対する私の基本的な理解からすれば、この英訳も外国語訳である以上不完全である部分を持つことを逃れることはできないが、日本語の「あのひと／あれ」よりは、人間を範疇的に指示するという意味でははるかにこの語に近いと判断するからである。

κείνοςのここでの役割が文法的には、Ebeling (s.v. κείνος, B-1, B-2)の記述するとおりであることをGriffinは、そう明言してはいないが、まず認めている。これが上のGriffinによる文が示している理解の前提となっていると考えて間違いない。つまり、κείνοςは、ὅςその他に始まる関係文(313)の先行詞の役割を果たすものと

(4) その種の「託宣」の中で最も名高いのは、恐らくA.Parryによるものであろう：A.Parry, *The Language of Achilles and Other Papers*, Oxford, 1989, 6. 彼は、この演説を理解することの難しさの背景には、アキレウスが英雄社会の他者だという事情がある、と断言している。

(5) M.Edwards, *Homer, Poet of the Iliad*, Baltimore, 1987, 231-6. 彼は、なぜアキレウスが要請を拒絶するのかを解明するのは無駄だ、と言っている。

(6) プラトンによる引用が中世写本の主要な線と食い違っている、あるいは、中世写本のある部分と重なっている、という、プラトン校定にとっても、『イリアス』校定にとっても複雑な問題を上の引用部分が含まれている。詳しくは、両者の校定本の校定注を参照。しかし、この問題はここでは論じない。

して使われている。これが Ebeling の B-1, B-2 という項目の意味である (*raro ad ea, quae sequuntur, spectat κείνος; praecedit κείνος sententiae relativae, quae accuratius explicatur*)。なお、B-1, B-2 という区分⁽⁷⁾は、κείνος が名詞として機能しているか、形容詞的に働いているか、という基準で為されている。

これがひとまず、上の Griffin の最初の文の意味である。また、「類いの人間」という日本語訳の意味である。

「私には、胸のうちには別の考えをしまっておいて、口にするのは／また別のこと、という類いの人間は地獄の門と同じほど憎たらしいからだ」という理由付けは (γάγ), 彼の真実を言うという宣言 (309-10) に結びついている。易しく言えば「自分は嘘をつく人間が死ぬほど嫌いだから本当のことを言う」という文脈をここは作り出している。つまり、嘘をつく人間に対するアキレウスの感情、あるいは、自分がそういう嘘をつく人間になると考えた場合の、架空の自分に対しての好悪感が、だから、本当のことをここでは自分は言うのだという宣言と結びついている。これが先に引用した Griffin の文章の 2 つめの文の意味である。

Ebeling の説明には、本稿の先行きを見込むならば、次のような解説を加え、分類をより精密にすることも出来るだろう。彼は、8 つの例をそこであげているが、そのうち 6 例 (*Il.*9.312; 13.232; *Od.*6.158; 8.209; 14.156; 15.21) では、関係文は、κεν (ἄν) + 接続法を用いているか、ὅστις という関係詞と接続法動詞という組み合わせになっている。関係文の記述する人間 (記述の対象は人間のみ) は、個別の人間に関するものではなく、類型としてのそれに関わっていることになる。

さらに言うと、6 例中の 4 例 (*Il.*9.312 = *Od.*14.156, *Il.*13.232, *Od.*8.209) では、κείνος の直前の語が母音で終わっている。κείνος に最も機能的にも韻律的にも近い οὗτος を使った場合、hiatus を認めなければならなくなる。

以上 6 例の他の残る 2 例 (*Il.*5.636; *Od.*24.321) は、直説法を用いている。つまり、関係文は多かれ少なかれ事実としての個別的人間を記述している。この探求においては、先の 6 例を中心に見て行くべきであろう。

κείνος (312) をめぐる先に掲げた文脈について今日我々が達している言語、文脈に関する知識について、私の側からの付加をまじえて解説した。ここまではいかな

(7) raro ではない、A 区分の κείνος は、ほぼ LSJ - ἐκείνος の記述の範囲内に即するものを含んでいると考えてよい。ちなみに、Ebeling による B 区分に該当する κείνος の機能については、LSJ には記述が見られない。本論文は、関係文が人間の類型を記述し、その先行詞として κείνος が使われ、その「遠い」という意味は、関係文を発言する人間がその人間類型に対して持つ距離感を表現しているのではないか、という推定を出す。この用法がホメロス以降にも見られるかどうか、どの近代の文法家の説明も見出すことが出来なかった。そもそも、このホメロスの用法 (Ebeling の B-1, B-2) に関して Chantraine や Monro による説明はない。文法的には極小の問題に巻き込まれてしまったのかもしれない。しかし、Ebeling の分類は何か探求が為されるべきことを言っていることは間違いない。探求が一部作家に限られているという限りで、本論文は (ἐ)κείνος というギリシア語のある文法的な範疇を総体的に論じる水準に残念ながら達していない。本論文がめざすのは、*Il.* のある箇所 of 伝統的な読み方が含む問題を論じることである。その限りの記述であるという点に鑑みて、本稿の文法記述が記述として完成していないという点をご了解いただければ幸いである。

る問題もない。これだけであれば、オデュセウスの口上に対するこのアキレウスの演説を理解するのが絶望的に困難だという事態を作り出すのに、*κείνος* (312) が「貢献」するということもなかったであろう。

しかし、Griffin の注釈には次のような文が付け加えられている：But it carries also a disobliging second meaning, in its implied contrast with what has just been said. Motzkus thinks the second meaning of *κείνος* is not Odysseus but Agamemnon. Plato refers it to Odysseus, *Hippias Minor* 365a.

ここで、この *κείνος* の読み方をめぐる問題の深い根が顔を出す。プラトンである。Motzkus⁽⁸⁾ も、引用文のさらに後に登場してくる Taplin⁽⁹⁾ もこの論文では取り上げない。私は、この *κείνος* の読み方をめぐる問題の根本のところは、少なくとも言語的な水準では、*κείνος* が、具体的な人間をさす (= あの人、あの男) 機能を持っているかどうかにかかっていると考えている。そこに問題があるのであって、さてそれが具体的には誰をさすか、という問題ではないと私は考えるからである。

予め議論の行方を明らかにしておく。Ebeling が *κείνος* B-1, B-2 に分類している *κείνος* は、基本的な文法的機能は *οὗτος* と極めて近く、韻律的な性格が少し異なるだけで、多分これが、ホメロスにおいて *κείνος* が *οὗτος* のかわりに使われた理由の大きな部分を占める。ただ、かすかに文脈に登場する人物への指示ではないけれど、指示的な機能が見られる。

2

しかし、Plato *Hp.Mi.*365a は、*κείνος* は、具体的な登場人物を指すと言っているようにも確かに読める。そして、この前4世紀になされた読み方が、20世紀末でも議論の対象であり続けていたという事情を、上の Griffin の引用はかいま見せてくれているということになる。

ここでは、ソクラテスの議論の相手であるヒッピアスが、アキレウスは真実の人であり、オデュセウスは偽りの人だとホメロスは描いていると主張している。そして、ヒッピアスは、私が最初に引用した範囲そのままの『イリアス』を引用した後、次のごとく言う：*ἐν τούτοις δηλοὶ τοῖς ἔπεσιν τὸν τρόπον ἑκατέρου τοῦ ἀνδρός, ὡς ὁ μὲν Ἀχιλλεὺς εἶη ἀληθῆς τε καὶ ἀπλοῦς, ὁ δὲ Ὀδυσσεὺς πολύτροπός τε καὶ ψευδῆς· ποιεῖ γὰρ τὸν Ἀχιλλεῖα εἰς τὸν Ὀδυσσεῖα λέγοντα ταῦτα τὰ ἔπη.* 「これらの詩句において、ホメロスは両者の性格を明らかにしている。つまり、アキレウスは真実の人で単純であり、オデュセウスは複雑・多様な性格で、偽りの人であると。オデュセウスに向かって、詩人はアキレウスにそれらの詩句をしゃべらせているからだ (同 365b)」

引用から明らかなように、プラトンは、ヒッピアスに、*κείνος* がオデュセウスを指すという議論を直接させているわけではない。ただ、アキレウスが、「嘘を言う人間は自分には憎悪の対象である」と宣言していることは間違いなく、*κείνος* と *ἐγών* の間には明らかな対比が表現されており (*αὐτὰρ* - *Il.*9.314)、この台詞がオデュセウ

(8) D.Motzkus, *Untersuchungen zum 9. Buch der Ilias*, Diss. Hamburg, 1964

(9) O.Taplin, *Homeric Soundings*, Oxford, 1992, 69-71

スに向かって発言されていることは間違いないから、Griffin のような言い方が間違えているとも言えない。付け加えれば、*Il.*9.312-3 はアキレウスの性格を反映しており、アキレウスの性格に対する詩人の見方をそのまま反映しているとヒッピアスが理解していることは前後の文脈から明らかである。

‘Plato refers it to Odysseus’ と主張して、κείνος に現実の登場人物たちへの指示が、二次的だけれどもと断っているとは言え、あると読むべきだと Griffin は主張しているのだが、しかし、この箇所に関して言えばこの深読みの強制はかならずしも正しい深読みとは言えない。また、312-3 の正確な理解を求める方向としては間違っているように思える。また、*Hp.Mi.* の文脈は、プラトンが『イリアス』をそう読んでいたことを保証しないと私は思うのだが、この後者の問題は、後で論じることにする。

3

正確に『イリアス』を読もうと思うならば、そういう根拠のあやふやな深読みを他者に勧めるべきではないだろう。普遍的な記述を持つ関係節の先行詞としてひとまず機能する κείνος が、同時に語り手アキレウスのまわりの具体的な人物に向けての指示を含み得るものか、また、*Il.*9.312 には同一形の詩行が他にも見つかるが (*Od.*14.156)、それとの関係はどうか、具体的にホメロス本文を見て観察できることを基礎に考えることを勧めるべきであろう。ここでは、まず後者から見て行く：

ἀλλ’ ἐγὼ οὐκ αὐτῶς μυθήσομαι, ἀλλὰ σὺν ὄρκῳ,
ὡς νεῖται Ὀδυσσεύς· εὐαγγέλιον δέ μοι ἔστω
αὐτίκ’, ἐπεὶ κεν κείνος ἰὼν τὰ ἄδύμαθ’ ἵκηται·
ἔσσαι με χλαϊνάν τε χιτώνά τε, εἵματα καλά·
πρὶν δέ κε, καὶ μάλα περ κεχηρημένος, οὐ τι δεχοίμην. 155
ἐχθρὸς γάρ μοι κείνος ὁμῶς Αἴδαο πύλῃσι
γίνεται, ὃς πενήνῃ εἰκῶν ἀπατήλια βάζει.

「だが、私はただたんにそう語るだけでなく、誓いとともにおう。

オデュッセウスが帰ってくる、と。よき知らせをもたらしたことへの褒美は、彼が自分の館にたどり着いたら、その時すぐにもらうことにする。

下着と外套、りっぱなのを、私に着せてくれ。

それまでは、困ってはいるのだが、受け取らないことにしたい。

私には、貧しさに負けてひとをだますようなことを言う

ような類い人間は地獄の門ほど憎たらしいからだ」 *Od.*14.151-7

見れば分るように *Od.*14.156 と *Il.*9.312 は全く同形である。もちろん、私たちは定型行を考えるべきだ。口承詩としてのホメロスにおける定型行あるいは定型行

群を作り出している基礎は何か。「物語を作り上げる要素としての一定の思想⁽¹⁰⁾」であろう。それはこの場合 (*Od.*14.156 = *Il.*9.312) 何であろうか。「話し手が、意外とも思われかねない事実を、これから真実を述べるという宣言とともにその直後に使う」。ちょっと長いが、これがここに見られる定型の基礎となる「一定の思想」ではないだろうか。宣言 (*Il.*9.309, *Od.*14.151-2a) の後に置かれるから γὰρ が使われる (「誓って本当のことを私は言う。嘘をつくのは死ぬほど嫌いだから」)。M.Parry の一派の成し遂げたことを全くの過ちだとするのでなければ、この程度は当然認めなければなるまい⁽¹¹⁾。

*Od.*14.156 = *Il.*9.312 は、明らかに自立した文を構成していない。だから、推定だが、*Od.*14.156 = *Il.*9.312 は、複数行からなる定型の一部であろう。恐らく、*Il.*9.312-3 そのままの 2 行定型を構成していたのだ。*Il.*9.313 は、明らかに文脈の具体的な要素に全く依存しない普遍的な記述のみで成立しているからである。これに反して *Od.*14.157 は、豚飼いのエウマイオスと乞食の姿をしたオデュセウスのやり取りという文脈の中で、乞食ならするかもしれないと一般に思われること (つまり個別の文脈) に合わせる形に適合・変化させられていて、明らかに定型的ではない。実際、*Od.*14 巻では、宣言 (151-2a) の後で、「定型」が直結することはない。「よき知らせへの褒美」として、着るものが欲しい、と乞食の姿をしたオデュセウスは語る部分が挿入される (152b-3)。また、言葉の真実性を保証するため、宣言のとおりであることが分ってからで、褒美はいいのだとも言っている (154-5)。明らかに *Od.*14.157 は、同じく関係詞によって導かれ、「嘘をつく人」という、*Il.*9.313 と基本的には同一の意味を持つ範疇的な記述をしながらも、この「挿入部分」に対応した変形を蒙っている。明らかに定型行ではない。*Il.*9.312-3 の形をした 2 行定型があり、『イリアス』の方はそれをそのまま使い、『オデュセイア』の方は、一部物語の具体相に合わせて変更して用いた。これが私の推定である。

*Il.*9.312 = *Od.*14.156 が定型行であるとすれば、この議論にどんな意味を持つのか。ホメロス叙事詩を無文字で創作的に伝承した口承叙事詩人たちは、自分が語ろうとしている状況をいったん一般的な状況 (例えば、ある人物が意外とも思われかねない事実を、これから真実を述べるという宣言をする、という状況) に戻して、つまり、技術知としての口承叙事詩人の知識の水準に還元した上で、定型的ないしは半定型的・半可塑的に自分の中で整理された知識に接近する。その技術知とは、定型的な詩行を産出する為に、ギリシアの口承叙事詩が長い間に構築した、体系化された詩句の総量と、それらを韻律的・物語的状况に依じて組み合わせる為の技術

(10) このような考え方は、formula に対する定義付けとして、Parry (M.Parry, *The Making of Homeric Verse*, Oxford, 1971) の様々な箇所でもイタリックで繰り返されている (例えば、同書 272)。

(11) Griffin が、ホメロス = 口承叙事詩論一派に対して極めて懐疑的な考えを持っていることはあまねく知られている。しかし、だからと言って、ホメロスの注釈書という形を取った本で、語句を説明するのに、彼らが明らかにしたことを恣意にまかせて無視してよいということにはならない。口承叙事詩論がどこまでホメロスの言葉を説明出来るかについて、様々な立場があり得ることは恐らく誰もが認めることであろう。しかし、20 世紀後半以降、彼らの基礎的な貢献を無視してホメロス研究も、ホメロス注釈も成立しないということもまた誰もが認めることであるだろう。

の総量である。そういった形で定型をそのまま取り出す、あるいは一般的な水準でいったん取り出した上で、必要であれば文脈的に加工して取り出す。これが、口承叙事詩人の「創作」の実態であろう。

もし *Il.*9.312 が定型行群の一部であれば、κείνος が文脈内の誰かを指示している可能性は極めて低い。あるいは理論的にはその可能性はない。口承詩人たちは、文脈の細部(その場面に至る過程で誰が何をしたか)をいったん捨象して一般的な状況に戻ることによって自分の口承詩人としての技術知に接近できるからである。その結果引き出された定型行が文脈の細部の人物を指示していたというのは矛盾ではない。secondary and unobligatory reference などというのは口承詩創造の基本的なメカニズムを知らない人間の妄想である。

実際、その証拠に *Od.*14.156 の κείνος は具体的な人物を全く指示していない。また、その可能性についてこれまで議論された形跡はまったくない。これはこの箇所を読みさえすれば、誰もが納得する筈のことからであるだろう。

以上、*Il.*9.312 = *Od.*14.156 が定型行であるという大きな可能性があるという側面から、κείνος (*Il.*9.312) が、文脈を構成している具体的な人物への言及を含むという可能性を考えることの不可を論じた。

4

Ebeling s.v. κείνος B-1, B-2 に掲載されていて、人物類型を記述する関係文の先行詞としての κείνος 6 例のうち、これまでに取り上げてきた 2 例を除く残りの 4 例 (*Il.*13.232, *Od.*6.158, 8.209, 15.21) についても、文脈内の細部に属する具体的な人物への言及・指示を疑うことはできない。これらは必ずしも定型とは言い切れない多くの例を含む。つまり、定型だから文脈内の具体的な人物を指さないのだ、という理由付けができないにもかかわらず、結果としては同じ事態が起きている。つまり別の、恐らくは文法的な理由があると予想される。

Ebeling s.v. κείνος B-1, B-2 に掲載されている、類型的記述の関係文とともにある 6 例のすべてが、文脈の細部を構成するいかなる人物をも指示しないというのは、一見すると不思議な事態にも見える。κείνος に Taplin が当てている that man という英訳はいかにも misleading な訳ではあるにしても、κείνος が語感の上では、οὗτος や ρの持つ中立性(the man who..「... のようなひと」) に比べればはるかに非中立的に見えることは確かだからである。

こういう事態を起しているひとつの大きな理由は、先にも指摘した事実ではあるが、該当する κείνος 6 例のうち 4 例が、前に母音で終わる語を持っていることであろう。これらの例では κείνος が οὗτος (後者の指示語は具体的な人物への指示力が κείνος より低いと誰もが感じる) を使えば生じる韻律上の不都合(母音連続)を避ける為に代替として使われたという可能性がある。あるいはより無色なるのかわりに使われた可能性も考えるべきかもしれない。我々の 2 例はこれに属する。

これらについて検討する前に、直説法を使った 2 例を簡単に見ておこう。これらの例は代替とは見えない使われ方をしている。そして、κείνος あるいはその変化形を使った理由が明確である。ひとつ (*Il.*5.636) は、今は滅びた世代の英雄たちを粹

の中に満たしているからだ(οἱ Διὸς ἐξεγένοντο ἐπὶ προτέρων ἀνθρώπων *Il.5.637*)。登場人物の誰も指示してはいないが、過去の英雄たちであるから *κείνος* が使われて不思議はない。もうひとつ (*Od.24.321*) では、*οὗτος* ではなく *κείνος* が使われている理由は詩的意図によるとも言える。オデュセウスが自分の正体を隠した上で父親のラエルテスに近付き、いろいろと偽りに満ちた問答の果てに「この私 (*ὄδε*) が、あなたがお尋ねになっているあの (*κείνος*) オデュセウスですよ」という驚きに満ちた場面に使われているからである。*ὄδε* と *κείνος* が詩的なたくらみに満ちた選択であることは明らかである。

6例の中から、韻律的な事情で *κείνος* が *οὗτος* の代替として使われている可能性がない2例を見よう。そのひとつでは、オデュセウスがナウシカアにこう言っている (*Od.6.158-9*) : *κείνος δ' αὐὸν περὶ κῆρι μακάρατος ἔξοχον ἄλλων, / ὅς κέ σ' ἐέννοιαι βρῖσας οἰκόνδ' ἀγάγηται*。「他のだれにもまして、その心、祝福された者であるでしょう、あなたを、結納の品々を積み上げた上で、迎え入れるようなひとは」。ここではあきらかに *κείνος* は *οὗτος* の代替ではない。*κείνος* は行頭に来ている。さらにこの *κείνος* は誰か具体的な人物を指してもいない。これは、文脈を説明しないでも明白だ。

同じ種類に属するもうひとつの例は、アテネがテレマコスに言う言葉の中に見つかる (*Od.15.21-3*) : *κείνου βούλεται οἶκον ὀφέλλειν, ὅς κεν ὀπιύη, / παίδων δὲ προτέρων καὶ κουριδίῳ φίλοιῳ / οὐκέτι μέμνηται τεθνηότος οὐδὲ μεταλλᾶ*。「彼女を妻に迎えたその人の家を富まそうとするものです。そして、以前の子供や、死んでしまった前の愛しい夫のことなど思い出もしないし、尋ねたりしないものです」

この例はややこしい。明らかにアテネは、再婚する未亡人一般について語っている。そしてその女性が再婚する相手について語っている。その相手である男性は、一般化を剥ぎ取ってしまえば、ペネロペの求婚者たちということになる。あるいは具体的にこの文脈では最有力求婚者のエウリュマコスということになる。だから *κείνος* は極めて間接的ではあるがエウリュマコスをも指している、という風にも理解できる。しかし、*κείνος* がエウリュマコスを指している指示語だとは言語学的には言えない。スパルタ(言葉が発せられている場所)とイタケの距離が、*κείνος* という指示語を詩人に選択させたとは誰も考えないだろうし、*κείνος* に直接にエウリュマコスを指差す力があるとは誰も読まない。ペネロペ (*μητέρα* - 15) とエウリュマコス (*Εὐρυμάχῳ* - 17) への言及から、一般的な言説 (*Od.15.21-3*) を紡ぎ出して来た過程そのものが、読む者あるいは聴衆にそれを具体的な文脈に戻して一般化された行の内容を受け取ることを求めるのだ。指示の力の源は一般化という過程にあると言うべきであろう。*κείνος* が選ばれたのは、まず、それが仮定の人物だからであり、話者からも聞き手からも距離のある人物範疇だからである。アテネは自分が未亡人一般の再婚相手となりうる人物範疇に属していないと判断している。我々の例との関連から言えばこうなる。範疇としての人物とその人物を語る場との関係で「遠距離」を意味する語がここでは選ばれている。*κείνος* は、文脈内の具体的な人物との関連で選ばれたわけでもないし、その人物を指示する語としての機能も認められない。かすかに求婚者やエウリュマコスと繋がっている感じがするのは、そういう人物たちとペネロペとから、この一般化文が導き出されて来ているという過程のせい

である。一方、我々の *Il.*9.312 には、具体的な人物から一般化関係節が導き出されたという過程は認められない。

確かに、我々の 6 例は、韻律的「代替」だけでは説明出来ない意味を持っている。それに明らかに別語であるものを単に代替と言って片付けてしまうには、誰でも躊躇を覚えるだろう。今のところ言いうことはつぎのようなことだ。6 例すべてに共通なことは、そこで人間の範疇が立てられ、それに κείνος という指示語がつくが、まず、その指示は、文脈に登場するいかなる具体的な人物への指示も含んでいない (*Il.*9.312 には指示があるという疑わしい主張があるが、これを無視する)。これは確認しておこう。これらの例で οὗτος ではなく κείνος が使われていることに共通の意味があるとすればつぎのようになるのではないか：範疇をたてる一人称の話者が自分はその範疇に属していないと明確に考えており、その一人称主体と範疇との距離感が οὗτος ではなく κείνος が使われていることと対応する。

その距離感は、*Il.*9.312 = *Od.*14.156 のように、敵対的なものであることもあり、上の 2 例のように必ずしもそうでないこともある。だが、話し手が、自分はそれに属していないと判断していることはかなり明白であるように思える。先にあげた例のうちのひとつ (*Od.*6.158-9) は、話者がその範疇に属しているかもしれないと疑われる度合いが最も大きな例である。確かに、ナウシカアの婿に、という誘いかけがナウシカの側の人間たちから話者であるオデュセウスに対してなされたことは間違いない。しかし、オデュセウスの側から言うならば、彼の気持ちがイタケを諦めて、パイエクスの島に残ってもよいという方に傾いた瞬間を、彼のこの島での滞在を歌う部分 (6 巻～13 巻冒頭) に於いては、我々は一度も認めることは出来ない。この距離感が οὗτος ではなく κείνος を選択した詩人の判断と対応しているのではないか。

扱わなかった 2 例についても簡単に見ておこう。*Il.*13.232-4 で記述される、戦の大事な瞬間に戦意を緩める者は、確かに話者であるトアス (= ポセイドン) にとっては嫌悪と叱責の対象である。*Od.*8.210-1 の関係文では他郷に在って、自分のその地での保護者になってくれている者 (ξεννοδόχος) と争うような者が記述されている。この文全体の話者であるオデュセウスはそういう者を愚か者 (ἄφρων) だと言っている。どちらの場合でも、話者が κείνος で示される人間の種類に自分が属していないと考えてこの発言を行っていることは明らかである。

英雄叙事詩の一行中の、理論的には 16 カ所で考えられる語の切れ目のそれぞれが母音連続を許すか許さないか、その許容度にはばらつきがある。だから、母音連続を避けるために κείνος が οὗτος のかわりに使われているという説明は、それだけでは、私たちの 2 例 (*Il.*9.312 = *Od.*14.156) についてすらも、片手落ちと言わねばならない。それに、κείνος という言葉で示される人間の種類に対して、話者は自分がそれに所属していないと考えている、という 6 例に共通する性格が加わる時、このかなり独自なものに見えるホメロス叙事詩での κείνος の使い方に関して汎用可能で恐らく今のところじゅうぶんな説明を得ることが出来るように思える。もちろん、この話者とそれぞれに記述される人間の種類の間の距離(「自分はそれに属していない」)が、κείνος が持ちうる距離感と一致することは言うまでもない。そのようにして選択された κείνος が、同時にたまたま文脈内の具体的な人物を指示しており、そ

れへの距離感もまた *κείνος* の選択に反映しているという事態は言語学的水準では没論でしかない。もし、唯一その可能性があるとするれば先ほどの *Od.15.21* のような場合だけである。つまり、範疇的に描かれる人物が、文脈内の人物を一般化して出来ている場合である。しかし、その場合でも、指示語の指示対象が具体的な人物であるとは言えない。たまたま「ほのめかし」としてその人物と繋がっているとすべきであろう。

5

プラトンの問題にも触れておこう。先にも言ったように、なぜこの例に限って *κείνος* が誰か具体的な人物を指しているのではないか、という議論が20世紀の後半でもまだなされていたという事実の遠い、しかし大きな理由だからだ。もしも、プラトンがこう言っているから、*κείνος* が登場人物の誰かを指していると、私たちは考えなければならないし、議論すべきなのだという意味を、先に引用した2つめの Griffin の発言が意味しているのだとすれば、粗雑な議論と言う他はない。あるいは、悪くすれば意図的な欺瞞である。その理由を以下述べる。

プラトンの多くの対話篇と同様、この *Hp.Mi.* という作品も、ソクラテスが誰かを捕まえて吟味にかけるという形を取っている。その際、ソクラテスの発言にプラトンの思想なり判断なりが深く関わっている、と考えることは出来る。実際、古代哲学研究者たちは多かれ少なかれそのように考えてきたのだ。しかし、ヒippias とかプロタゴラスとかといった吟味の対象になった人物たちの発言にプラトンが責任を持って関与しているとは、古代哲学研究者たちの誰も考えては来なかったはずだ。むしろプラトンにとっては批判の対象であったというのがより正確だろう。

この作品の、ヒippias が主張している「詩人はアキレウスを単純で真実の人として描いており、オデュセウスを複雑で偽り多いひととして描いている、この部分(つまり『イリアス』第9巻の私が引用した部分)がその証拠だ」という見解をも、プラトンは、批判すべき対象、あるいは疑いを向けるべき対象だと見ていることは明らかであるように思える。

この両者の性格についてホメロスがそう描いているのだ、というヒippias の主張に関してソクラテスは徐々に彼を追いつめて行く。とうとう、このアキレウスの大演説の中の「明日にもミュルミドン勢を連れて故郷に帰るのだ (*Il.9.357-63*)」という発言と、アキレウスとアイアスの間の続くやりとりの中での、明らかにアキレウスが明日以降もトロイアの岸辺に残っていることを前提としてなしたかに見える彼自身の発言 (*Il.9.650-5*) との矛盾を指摘して、実は、ヒippias 式の主張を貫けば、アキレウスも実は偽り多きひとであるようにも描かれていることを認めさせてしまうのだ (*Hp.Mi.371b-d*)。ヒippias による、*κείνος* はオデュセウスを指示していると彼が読んでいと取られかねない発言(先に引いた *Hp.Mi.365b*) は、プラトンの責任を持って関与した『イリアス』理解の一部であるとはとうてい言えない。むしろ、正確には、プラトンが、極めて俗っぽい『イリアス』の読み方として批判あるいは揶揄している種類の読み方だと言えるだろう。

以上の議論をいったんまとめておこう。*Il.9.312* の *κείνος* は、それが定型行の一

部であるらしいことを考えれば、個別の文脈の細部に属する誰か個別の登場人物を指示する意味を担っているとは思えない。また、同じくひとの類型を記述する関係詞の前に置かれた先行詞として機能するかなり特殊ホメロスの語法としての κείνος の、他の類似したどの用例も、それが使われた文脈内の誰か特定の個人を指示しているとは見えない。こういった事情にあるにもかかわらず、この κείνος だけ、オデュセウスを指しているのではないか、いや、むしろアガ멤ノンではないか、という議論が昔から延々と為されて来た⁽¹²⁾ ことを、Griffin の注の、後で引用した部分がかいま見せている。その議論の原動力となって来たのは、彼の注では、‘Plato refers it to Odysseus’ という形で現れている、*Hp.Mi.* の一節である。しかし、その『イリアス』第9巻の読み方は、紀元前4世紀に見られた俗な読み方のひとつではあり得ても、本当の意味でプラトンに帰するのは明らかにはばかられる使い方を実はされているのだ。

6

なぜこんな誤読が行われて来たか。もちろん、この読み方を議論して来た、Griffin を含めたホメロス読みたちが、‘Plato refers it to Odysseus’ ということの実態をわざと歪めて理解して自分たちの議論を正当化して来たとは私も思わない。そう読みたい傾向がまずあり、それでヒippiアスの発言にしか過ぎないものをプラトンの読み方だと、警戒もせずに信じてしまったということであろう。

ここでは、もう誤読と決めつけて議論するが、この誤読は、アキレウスの怒りが何であるか、という理解に関わるひとつの共通の誤解と結びついているのであらうと私は推測する。第9巻の、オデュセウスの最初の口上(225-306)に対する、つまり、アキレウスに戦場に復帰して欲しいというアカイア勢全体の依頼の意思であり、謝罪でもあるものに対する、アキレウスの全面的な拒否演説(307-420)をどう理解するかが、この怒りをどう理解するかの重要な問題であることは間違いない。具体的に言えば、この点に関して共通の誤解がある、と私は考えている。ここでは、できるかぎり簡明な議論を試みたい。

「社会には、人間が社会的な振る舞いをする際の基準となるコードというものが存在する。もし、あるひとが償いの申し出に対して拒否の回答をすれば、彼の拒否が、そのコードを基準にして、理不尽なものであるというそしりを受けざるを得ないことがある。ただし、その償いの量が、彼の(失われた)ティーメー(名誉)をしかるべく回復するのに十分である場合に限るけれども。アキレウスの振る舞いがとりわけ遺憾であるのは、彼が空腹・憤懣の気持ちと、友情や、兵士としての忠誠より大事にしている点にある⁽¹³⁾」

これは、ギリシア文学の為の名高い入門書の一節であり、ここで、論者は我々が

(12) ちなみに報告すれば、最近の日本語訳である松平訳も、本文は Ebeling を踏まえている。しかし、実はオデュセウスかアガ멤ノンを暗に指しているのだ、という注を付けている。問題の根は深い、と言うべきだろう。

(13) H.Lloyd-Jones, *The Justice of Zeus*, Berkeley and Los Angeles, 1983 (revised edition), 17

議論している演説でのアキレウスの態度を非難している。そして、私は、彼の非難的はずれだと考えている。しかし、彼の非難は、ある条件を『イリアス』が満たしてさえいれば、全面的に正しいことになるだろう、と私は思うのだ。論者は19世紀以来出現した国民国家による戦争という事態を、無意識にはあろうが、『イリアス』を理解する前提に使っている。その傾向は上の短い引用にもかいま見えているように思える。もちろん、古代ギリシアでの国境認識ないしは国家認識は、古代ギリシア全体をとおしても、明らかに近代の国境認識ないしは国家認識とは違ったものであったろう。しかし、それでも、アカイアの陣営とトロイア城の間に、近代の国境と本質的には同じ区別の線が引かれていれば、この論者の上の非難は的はずれではなかっただろう、と私は思う。さらに言えば、Lloyd-Jones はアキレウスをそう呼びたければ「国家への裏切り者」とまで呼ぶことができるだろう。だが、たぶん『イリアス』の登場人物にも、詩人にも、『イリアス』が成立した当時の聴衆にも、アカイア勢とトロイア城の間に、近代的な意味に比すことができるような国境線は認識されていなかった。これが、上に引用したアキレウスの怒りに対するほとんど叱責に近いとも言える、Lloyd-Jones の発言を、私が的はずれであると考えた理由である。ただし、『イリアス』に国境線を持ち込むのは時代錯誤ではないのかという「疑い」を持ったのは私が初めてではない⁽¹⁴⁾。もしかしたら初めてなのかもしれないことは、この「疑い」をもってこれまでの読み方をギリシア語理解の細部まで含めて再検討しようとしていることだ。ここで議論した *κείνος* が具体的に誰かを指示しているかどうかという問題も、その再検討の一環であると理解して欲しい。

κείνος がオデュセウスを指しているかも知れない、II.9.312-3 の関係文の内容となっている人物はオデュセウスのことを当てつけているかも知れない、というような、俗っぽいヒippiアスの読み方に引き摺られて、深刻に悩んだりするのは、結局のところ、アキレウスの怒りを仲間うちの(同一国の軍隊の中での)仲違いの水準で理解しようとする点で、恐らく皆ヒippiアスと同じだからなのだ⁽¹⁵⁾。

『イリアス』で、アカイア勢とトロイア勢の間に、国境線に類似した、あるいは本質的に同じものを引いてしまえば、アキレウスの怒りは、アカイア勢全体という社会的存在とアキレウス自身の関係の根源に関わるものにはなり得ない。アキレウスはアカイア勢の一部でしか、そもそもあり得ないからである。一部としか考えられなければ、アキレウスの度はずれたもののように見える怒りも、結局、仲間うちの人間関係的な軋轢の類いとしか、誰の目にも見えなくなる。アキレウスにとっては摩擦の対象はこの場合アガメムノンかオデュセウスしか考えられない。従って、*κείνος* がどちらかの人物を指示している、という事態は明らかにギリシア語文法を勘案すれば疑わしいことがらだと薄々見当がついていても、このアキレウスの復帰

(14) 最も古い時代に疑ったひとはトュキュディデス (*Thucydides*, 1.3)。

(15) プラトンが、『イリアス』の世界と国境についてどのように考えていたかは、切に知りたいと願うところであるが、手がかりは今のところ得られていない。ヒippiアスに対するソクラテスの揶揄を考慮すれば、それに彼の極めて尖鋭的でかつ執拗なポリス国家の原理への追究のことを考慮に入れば、トュキュディデスと同じことを認識していたという可能性はじゅうぶんある。

要請拒否演説をアカイア勢内の人間関係の範囲内で読もうとしてしまうのである。

このオデュッセウスの口上に対するアキレウスの拒否演説は、実際のところは恐らく「裏切り」というよりはアカイア勢という社会集団に対するアキレウスの「見切り」宣言である。私たちが検討した冒頭の部分は、その「見切り」という、やや信じがたいことにも見えることが、自分の本当の気持ちだと宣言している部分であるのだ。そう見なしてこの演説を読めば、どこも難しいことはない。

「牛どもや、羊の群であれば、略奪することもできるだろう。／3脚の鼎なら、また、亜麻色の頭を持つ馬どもなら、手に入れることもできるだろう。／ところが男の命は、いったん、それが齒列の間を越えてしまえば、／略奪によっても、誰かから取り上げてでも、2度とふたたび戻っては来ない。／こんなことを言うのも、私の母、白い足のテティスが、私が／命の終わりに向けて、二筋の定められた道を歩むしかない、と告げているからだ。／すなわち、ここにとどまり、トロイアの城国を相手に戦い続ければ、／私の帰郷は不可能、しかし、不滅の名声が残っている。／しかし、家に向けて進んで、私の故郷に着けば、／よき聞こえは失うけれども、私の命は永いだろう、／早々と死の終わりが私に追いつくこともないだろう、と。／それで、他の者たちにも、私は勧めたいのだ。／故郷に向けて船を出すようにと」(II.9.406-18)

運命のいたずら、と言うべきか、運命のさだめのままに、と言うべきか、彼がここで宣言している(トロイアの戦場にとどまり不滅の名声を得るかわりに、帰郷するという選択肢を取る)とおりに、『イリアス』は進まない⁽¹⁶⁾。しかし、アキレウスがこの地で、アカイア勢の一部として命を賭して戦い続けることを、戦士としての慎重な価値判断とともに、ここで拒絶していることは明らかだ。使節の一行に「君たちはともに命を賭けて戦う仲間ではない」とアキレウスは明言しているのだ。

アカイア勢が国家に準じるものであれば、この言葉を軍の正使に対して発するアキレウスは反逆者・裏切り者である。たぶんこれまでひとは、無意識のうちにアカイア勢を国家に準じるものとして想定しながら『イリアス』を読んで来た。その想定のもとではアキレウスの拒絶は、そのままを読めば、彼を反逆者の地位に落としかねない意味を持つ。これは受け入れられない読み方である。あるいは狂人である。この読み方はいくらかの支持者を持っている。しかしいづれにしてもヨーロッパ文学の最も古い詩物語のヒーローが反逆者・裏切り者あるいは狂人では困るのである。あくまでも人間関係の上での軋轢の上にある暴言と読みたかった。これが、ヒッピアスの読み方から、Griffinの注までを貫いて来た心理ではないだろうか。

しかし、アカイア勢は国家として、あるいは国家に準じるものとして詩人にも聴衆にも捉えられていなかった。では何か。アキレウスという戦士中の戦士が、その戦士としての存在を賭けた判断の後に、つまり単に腹立ちのあげくではなく、参戦拒否出来るような種類の社会集団なのだろう。このことを認めるしか、『イリアス』という物語を正しく理解する方法はないように思われる。そのような社会的な関係を認めることが、それが拒否演説を行ったアキレウスを、反逆者でも裏切り者でも

(16) この間の事情をさして *Hp.Mi.* のソクラテスは、アキレウスも嘘をつく、と評したわけだが、それはあくまでも、俗な『イリアス』の読み方をからかう為の議論と考えるべきだろう。

狂人でもないひとりの特異な英雄として読み取ることには私たちに導く道だと私は信じる。この関係を追究することが、『イリアス』の背景にある社会認識を正しく追究する道だと信じる。

以上、*Il.9.312* の *κεῖνος* が、アガ멤ノンを指すとかオデュセウスを指すとかという議論は、『イリアス』に国家を持ち込むという、これまで無自覚であったが故に根深いものでもあった間違いと深い関係があるだろうということ、そして、そのような読み方はホメロス語としては、冷静に判断すればここでは成立しないということ論じた。

(北海道大学)